

【令和6年度】とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1491
施設名	はるの小川ちとせ保育園
施設所在地	東京都渋谷区代々木4丁目5-7-6
法人名	社会福祉法人ちとせ交友会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「食育」
日頃から身近で大事な「食」に注目し、子どもたちが苦手意識を持っている野菜を主役にした「食育」をテーマとして設定した。

<テーマの設定理由>

五感が発達している未就学の時期に「食」に関する知識をつけ、農業が持つ教育的な価値に目を向けて、様々な体験を得てもらいたい。
土や野菜に触れた時の感覚や香り、生き物、植物など、「どうしてきゅうりを切ったら水が出て冷たいのか？」など、食べているだけでは気付けない野菜の不思議、自然のパワーを問いとして設定することで、「こんなの初めて見た」と「もっと知りたい（触りたい）」という子ども達の知的好奇心を育みたいと考えたため。
「たべる」だけでなく「つくる」のところまで繋げてあげたい。

2. 活動スケジュール

令和6年11月：収穫体験&畑探検
令和6年12月：食育授業
令和7年1月：食育授業

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

収穫体験：
・子どもが収穫体験できるよう、整地や備品の準備
・安全な移動に配慮するための下見と人員配置（外部講師の派遣実施）
・農家さんと実施内容の調整打ち合わせ

食育授業：
・専門の外部講師を呼んで園内で開催できるように野菜の購入、備品の購入

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

収穫体験：
練馬区の農家さん協力のもと、貸切バスを利用してさつまいも収穫体験を行った。土や虫を怖がるような子や、掘り方や掘るスピードも個人差が様々で、各々が楽しみ方を見つけて自然に畑で過ごす事ができていた。その他にも畑を探検し、スーパーでは見ることが出来ない様々な野菜の本来の姿を知る機会にもなった。昼食は畑の真ん中でお弁当を食べて、自然の中で感じたり、美味しいものを食べるという喜びを体験した。

食育授業：
本物の野菜を切る、ちぎる、折るなどして、五感を通じてその音や食感、外側の皮と中の部分の違いなどを知る。楽しく学べるようにクイズの要素を取り入れて実践した。外部講師が実施することで、子ども達にもいつもとは違う新鮮な情報が入っていくようで、いつもよりも聞く姿勢が出来ている子どももいた。なかなか調理前にじっくり野菜に触れる時間が取れていることはなく、子ども向けに野菜のパワーを説明してくれることで、子ども達も最後まで飽きずに五感を活用して参加できていた。
紙芝居を活用し、「野菜を作ってるのは？」「農家さん！」、「ご飯を食べる時にいう言葉は？」「いただきます！」「ごちそうさま！」というようなやり取りも経て、食べ物大事にしてもらおう気持ちも持つてもらおうように心がけた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

食育活動を繰り返し行うことで、子ども達の感情が「野菜も生きている」と捉えて、野菜の成長や大切さを身をもって体験している様子が伝わった。

例えば大根の匂いは「からい」というが、じゃがいもの匂いは「ポテトの匂い！」など、次々と子どもならではの感想が浮かび、子ども達の純粋な好奇心やワクワクしてる様子、細かい変化に気づいて声を挙げている様子が見られた。

「話を聞いてたら、おなかすいちゃった」という子も。中には触りたくないという子もいたので、一人ひとりに押し付けるのではなく、やりたいように触らせてあげることが意識した。

保育者も一緒になって楽しんで参加することで、その時だけで終わるのではなく、今後の保育活動において保育園が伝えれるメッセージを考えるきっかけにもなった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

授業では、実際に目で見て、手で触って、匂いを嗅いでという五感を刺激する良い機会になった。

保護者からも参加したいという声もあった。

種クイズでは大きさの違い種、収穫時期に出来上がる野菜の大きさとは関係なく、様々な大きさと形があることを現物を見て知ることができた。

収穫体験では、さつまいもの収穫だけでなく、先生同士でどちらが早く収穫できるかという遊び心も持たせることで、子ども達も注目して楽しめる工夫が見られていた。

園だけで開催する場合、農家さんとの日程調整などが難しく、当日も収穫のみで終了する傾向が多い中、外部講師と連携することで、職員の負担を最小限にしながら、いつも以上に子どもたちに食育を体験させてあげることができた。

栗の木で栗が育つ様子や、冬野菜の赤ちゃん、原木しいたけの育つ様子なども探検で見ることが出来て、普段は体験できない世界観を楽しむことが出来たのが良かった。